

言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 今村 純子
論 文 題 目 シモーヌ・ヴェイユの詩学
学位取得年月日 2010年2月10日

従来、シモーヌ・ヴェイユ研究は、その生の美しさや宗教的経験を論じるものが大半であり、彼女の思想に深く踏み込んで論じたものは少なかった。本論文は、シモーヌ・ヴェイユの哲学を美学・詩学の視座において論じたものである。自らの「工場生活の経験」（一九三四—三五）を遠景にもちつつ発語された、「労働者に必要なのは、パンでもバターでもなく、美であり、詩である」というヴェイユの言葉は、社会科学と美学・詩学との連続性を問うものであり、本論文は、「見える世界」が極度に重んじられる現代にあつて、「見えない世界」が根をもってはじめて「見える世界」が豊かに花開くことを提示するものである。そしてまた、美と詩は、わたしたちの各々の現場において、自らの感性を通して把握されるものであり、本論文は、「感性による社会科学の構築」という新たな地平に寄与すると思われる。

「不幸と真理との一致」は、古来しばしば言及されてきたところである。だが、両者の一致が前面に押し出されるとき、「不幸」という現象そのものに価値が置かれる危険性がある。だが、ヴェイユが「不幸における美的感情の湧出」と述べるとき、そこで指示されるものは、不幸の直中で、自己が自己から離れることにおいて、自己が「対象／物質」に「映る／移る」ことを通じて、「人間と神／物質と人間」が、まったく等価な眼差しのもとに立ちあらわれ、「世界の秩序」すなわち「物」が「世界の美」として、それぞれの心に映し出されるということである。この美の感情は、わたしたちが真に「^{リアリティ}実在」に触れている証であり、美の感情におけるニヒリズムの克服が、シモーヌ・ヴェイユ形而上学の柱となっている。

透徹した実在への眼差しは、「神と人」、「人と物」、「超自然と自然」といった「相反するものの一一致」を看破する。そして、一見矛盾するように思われる絶対的に隔たったもののあいだにこそ調和が見られることは、実のところ、芸術において生きられ感じられている。音楽で聴かれるのは音そのものではなく、絵画で見られるのは色彩そのものではない。そうではなく、音を超えたないし色彩を超えた、「^{リアリティ}真空」に映し出されたイメージを通して感受される「実在」である。

なににもまして、プラトン『ティマイオス』に深く沈潜し、「芸術創造」から「世界創造」、さらに「生の創造」を導き出すシモーヌ・ヴェイユの思想に光を当てることは、単なる観念論とみなされがちな「プラトニズム」が、読者一人一人の現場において生きれ感じられる可能性をも問うものである。

もっとも抽象的なものは、もっとも具体的なものから立ち上げられ、そしてまた、もっとも具体的なものに還元されてゆく。さらに、「特殊」は、「特殊」の徹底によって、すなわち、「特殊」において「特殊」を離れることによって、普遍へと転換してゆくのである。

以上を踏まえて、本論文の四つの特徴を少しく記しておきたい。

第一に、本論文では、シモーヌ・ヴェイユ全集第一巻『初期哲学論文集』が、なによりデカルト哲学を基底にして論じていることに着目し、カントのみならず、デカルトがどのようにしてプラトニズムと結びつき、シモーヌ・ヴェイユの哲学思想を開花させているのかを示している（第一章、第二章、第三章）。

第二に、本論文では、シモーヌ・ヴェイユと直接的な影響関係にはない日本の二人の哲学思想家・西田幾多郎と鈴木大拙との比較研究をしている。直接的な影響関係にない両者の「実在への眼差しの深さ」を問い直すことで、両者の言葉を震撼させ、現在に生きられ感じられる言葉を提示している（第六章、第七章、第一四章）。

第三に、本論文では、映画という芸術をシモーヌ・ヴェイユのロゴス（関係・言葉）にぶつけてみたときに、いったい何が見えてくるのか、を問うている（第四章、第八章、第十一章、第十五章、第十九章）。ヴェイユは死の直前、両親に宛てた手紙でこう述べている。「自らのうちに純金の預かりものが宿った感覚を払拭できないが、この純金の預かりものを与ってくれる人がいないのではないかと。なぜなら、この純金の預かりものは緻密であり、分割できず、これを受け取るためには、注意の努力が必要なのであるが、誰もこの努力をしてくれないのだから」。この「純金の預かりもの」にまったく異質な光を当てることで、その片鱗を少しく浮き彫りにしようとしている。このことは、「宇宙は思い出からなっている」というヴェイユの思想の核となる言葉を問い直すことでもある。わたしたちが何かを思い出すときには、その記憶に対するわたしたちの愛がなければならない。愛がない場合には記憶はあっても思い出されることはない。翻って、映画は、なにより、一定の時間のなかで、鑑賞者自らの記憶を思い出させるものであると同時に、鑑賞しているさなかの記憶を思い出させるものである。それゆえ、シモーヌ・ヴェイユの思想という「純金の預かりもの」を照らし出すのにもっとも適切な芸術であると思われた。

第四に、本論文は、シモーヌ・ヴェイユの思想を現実の状況に照らして問い直している（第一

一章、第一六章、第一九章)。ヴェイユの思想は抽象的な思弁から立ちあげられたものではない。己れの生々しい現実、己れを限りなく否定してくる現実との衝突から生まれ、それが形而上学的な高みにまで昇華されている。こうした思想は、自ずから再び現場に立ち返る使命を持っていると言えよう。シモーヌ・ヴェイユが、広くそして深く、確固たる現場をもつ労働者や芸術家のあいだで読まれ続けていることが、なによりその証左となろう。

本年二〇〇九年は、シモーヌ・ヴェイユ生誕一〇〇年の年にあたる。この区切りの年にあつて、本論文は、深く美しいシモーヌ・ヴェイユの思想が、とりわけ、自らの生に希望を失いかけた人々の心のうちにおいて、静かに輝きうる契機となることを願うものである。

章立ては以下の通りである。

まえがき

第一部 労働と詩

第一章 プラトニズムと現代

一 自覚について

二 痛みが美に変わるとき

三 善への転回

四 力を打ち砕く愛

第二章 「デカルトにおける科学と知覚」をどう読むのか

一 知覚と自由

二 純化された想像力

三 「何」が「私」であるのか ——労働と存在論

第三章 詩学の可能性

一 詩と自覚

二 「真空」の経験

三 「身体性の原理」と詩

四 詩学がひらく人間学

第四章 ケース・スタディ1

映画『女と男のいる舗道』をめぐって——瞬間の形而上学

- 一 「私」が「私」で「ある」ということ
- 二 第二の誕生
- 三 本質と属性
- 四 「現象としての死」と「本質としての死」
- 五 言葉と欲望

第二部 美とは何か

第五章 美と神秘——感性による必然性への同意

- 一 認識と距離
- 二 不幸と美——「目的なき合目的性 (finalité sans fin)」の射程
- 三 世界の美と世界の秩序
- 四 芸術論における救い

第六章 美と実在——シモーヌ・ヴェイユと西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」

- 一 距離があること、距離がないこと
- 二 「真空」と「絶対無」
- 三 「弱さの強さ」と美
- 四 芸術と超越

第七章 「詩」をもつこと——シモーヌ・ヴェイユと鈴木大拙

- 一 シモーヌ・ヴェイユにおける「東洋的なるもの」
- 二 「純粹なるもの」との接触
- 三 「詩」と詩的言語の可能性

第八章 ケース・スタディ2

映画『千と千尋の神隠し』をめぐって——アニメーションの詩学

- 一 アニメーションがひらく倫理
- 二 見えるものと見えないもの
- 三 欲望と愛
- 四 恩寵と優しさ

第三部 善への欲望

第九章 愛について

- 一 媒介としての「愛」——マルクスからプラトンへ
- 二 善と必然の矛盾をどう生きるのか
- 三 数学——知と愛の合一

第一〇章 脱創造あるいは超越論的感性論

- 一 「脱創造」とは何か——〈愛の神〉の似姿
- 二 「超越論的感性論」のゆくえ
- 三 シモーヌ・ヴェイユによるニヒリズムの超克

第十一章 ケース・スタディ3

映画『ライフ・イズ・ビューティフル』をめぐって——善への欲望

- 一 動機の問題
- 二 善意志と「善への欲望」
- 三 恩寵と自由の問題
- 四 「リアリティ」とは何か

第四部 芸術と倫理

第一二章 表現について

- 一 見えない世界の確かさ
- 二 表現と倫理
- 三 美的感情
- 四 表現と芸術

第一三章 芸術創造と生の創造

- 一 生の創造における「労働と芸術」
- 二 想像力の問題
- 三 重力と恩寵

第一四章 芸術という技、労働という技

——シモーヌ・ヴェイユと西田幾多郎『善の研究』

- 一 表現と形式
- 二 ポイエーシスとプラクティス
- 三 その倫理性

第一五章 ケース・スタディ 4

映画『アメリ』をめぐって——見える世界と見えない世界

- 一 記憶と自覚
- 二 対話における象徴の役割
- 三 有限のうちなる無限
- 四 三人称の世界から二人称の世界へ

第五部 詩をもつこと

第一六章 暴力と詩

——「人格と聖なるもの」、「『イーリアス』あるいは力の詩篇」を手がかりに

- 一 「権利」の彼方の「正義」
- 二 殺人と「想像力」
- 三 「詩」が「力」を超えるとき

第一七章 美的判断力の可能性——シモーヌ・ヴェイユとハンナ・アーレント

- 一 「美しい」と判断される位相
- 二 共通感覚と天才

三 正義と美的判断

第一八章 暴力と愛

- 一 状況のなかの詩
- 二 善を欲望する魂の部分
- 三 『アンチゴネー』と現代
- 四 暴力を破壊する美と詩

第一九章 ケース・スタディ5

映画「ガイサンシー（蓋山西）とその姉妹たち」をめぐって——美しさという境涯

- 一 「見えない世界」と美しさ
- 二 リアリティと自由
- 三 暴力と詩

附論 日本におけるシモーヌ・ヴェイユの受容

- 一 日本でのシモーヌ・ヴェイユ研究に関する三つの大きな潮流の紹介
- 二 シモーヌ・ヴェイユの思想と日本人
- 考えられる解釈とそのいくつかに孕まれる危険性

結びにかえて——ほとんど無、あるいは美

初出一覧

年譜

文献目録

註

各章ごとの要約は以下のとおりである。

第一部 労働と詩

第一章 プラトニズムと現代

シモーヌ・ヴェイユの古典的研究書『シモーヌ・ヴェイユの宗教形而上学』（邦訳：拙訳『シモーヌ・ヴェイユの哲学』）の著者ミクロス・ヴェトーは、シモーヌ・ヴェイユを指して、「二〇世紀におけるただひとりのプラトニスト」と述べている。その所以は、プラトニズムが現代において生きられ感じられるものとしたただひとりの人物であるということである。それは、不在の神への愛という眼差しが、自らに襲いかかる苛酷な必然性に対して、イエスと言いうる、すなわち、同意しうる、可能性を提示しているということに収斂されてゆく。「見える世界」を生きるわたしたちは、「権威」、「権力」、「名誉」といった「高きもの」に否応なく向かってゆく自然性のうちにある。だが、ただひとつ「美的体験」においてだけは、「儂さ」、「脆さ」、「弱さ」といった「低きもの」に留まることに、生き生きとした躍動を伴って同意する。この逆説的な真理を、みずみずしいイメージをもって形而上学を開示するシモーヌ・ヴェイユの著作『前キリスト的直観』における記述を丁寧に追うことによって開示しようとしている。なお、本章は、本論文全体の要約の役割をも果たしている。

第二章 「デカルトにおける科学と知覚」をどう読むのか

シモーヌ・ヴェイユ全集第一巻『初期哲学論文集』（未邦訳）では、その師アランに倣い、童話や物語や神話といった「具体的なるもの」のうちに形而上学的探究がなされている。そしてそれを可能とするのは、ヴェイユのデカルト哲学への眼差しである。本章では、全集第一巻の最後に収められている、ソルボンヌに提出され、そしてソルボンヌではまったく認められなかった、学位論文「デカルトにおける科学と知覚」を考察することを通して、逆説的にも、この論文がのちのヴェイユの政治・社会的論考と、愛に貫かれた美的判断力批判の展開を可能とする、どのような跳躍版となりえているのかを見定めようとしている。

第三章 詩学の可能性

本章では、シモーヌ・ヴェイユの思想を象徴すると言える、論考「奴隷的でない労働の第一条件」における言葉、「労働者に必要なのは美であり詩である」の意味を少しく明らかにしようとしている。ヴェイユにおける自覚とは、「神に倣うこと」であり、その神とは、「無」であるのと同時に「詩人」であるということにほかならない。この位相は、「無」の一步手前の「ほとんど無」を考察することによって明らかになってくる。この世界で「ほとんど無」であるとは、社会から放擲されることによって、人々の目からほとんど見えない存在となることである。それゆえ、「貧困には何にも代えがたい詩がある」というヴェイユの言葉は、一切の社会的威信が剥奪された場所において、逆説的にもいっさいの力から逃れ出ているがゆえに、詩が萌えいずるのであり、ここにおいて、人間のもっともいきいきとした感情である美の感情がみなぎるがゆえに、真に自由でありえ、真に自覚が成立しうる。

第四章 ケース・スタディ 1

映画『女と男のいる舗道』をめぐって——瞬間の形而上学

映画監督ジャン・リュック・ゴダールが、シモーヌ・ヴェイユから多大な影響を受けて作品を制作していることは、よく知られている。近年の作品『愛の世紀』では、シモーヌ・ヴェイユの名がダイレクトに言及され、『アワー・ミュージック』は、シモーヌ・ヴェイユの思想をモチーフにした作品であると言っても過言ではない。だが、真にシモーヌ・ヴェイユの作品が内在化されていると言えるのは、詩的イメージにおいて自覚の過程を描いた初期作品であると言えよう。本章では、初期作品の集大成と言える映画『女と男のいる舗道』を取り上げ、労働と自覚、労働の疎外さらには人間の疎外が、芸術という美的表象において、どのようなあらわれをもつのかを提示することによって、シモーヌ・ヴェイユの自覚の過程を少しく明らかにしようとしている。

第二部 美とは何か

第五章 美と神秘——感性による必然性への同意

本章では、わたしたちの自然性においてはなしえないと思われる「神への愛」であり、「必然性への同意」が、美という「感性における超感性のあらわれ」であり、なおかつ存在論的基盤において可能となることを開示しようとしている。ヴェイユの「美の観念」は、また同時に、カントとプラトンの思想が交差する場所でもある。カントが美の第三契機として提示した「目的なき合目的性」の観念が、ヴェイユにおいて、プラトンによる「媒介としての愛の観念」から読み解かれることによって、美のみならず不幸の観念へと変容されてゆく。不幸において美的感情の湧出があるからこそ、苛酷な必然性に愛をもって同意しうる可能性が見出されるのである。

第六章 美と実在——シモーヌ・ヴェイユと西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」

本章では、ヴェイユ自ら「純金の預かり物」と称する、緻密で硬質のヴェイユの思想を、とりわけ東洋に生きる者にとって生きられ感じられるものとするために、直接的な影響関係にはないものの、「実在への眼差しの深さ」は共通していると言える西田幾多郎の思想に衝突させ、そこで見えてくる^{リアリティ}実在の閃光を掴み取ろうとしている。とりわけ、同様の構造をもつヴェイユの「脱創造」と西田の「逆対応」において、前者では、美が不可欠であるのに対して、後者では美が消失していることに着目し、なぜヴェイユ思想において社会科学と美学・詩学が連続性をもちうるのかを明らかにしようとしている。

第七章 「詩」をもつこと——シモーヌ・ヴェイユと鈴木大拙

シモーヌ・ヴェイユと鈴木大拙は直接的な影響関係にはないものの、ヴェイユはしばしば自らの思索ノート『カイエ』に、大拙の『禅仏教論集』（英訳）からの引用を記している。一方、一九六〇年代になって、大拙は、自らの言葉が西洋の一女性の手によって引用されていることに驚嘆し、自身との思想の共振を次のように記している。「労働者にはパンも必要だろうし、バターも必要であろう。しかしそれよりなにより、詩が、英語で言うポエジが必要だと述べている。これはシモーヌ・ヴェイユというような人でなければ言えないかと思う」。自己とは絶対的に異なるものに自己を見出すそのダイナミズムにおいて、彼らの言葉が彼らという個を離れた真理を体現していることが知られよう。本章では、大拙が述べる「東洋的なもの」がヴェイユの思想においてどのように体現されているのかを見定め、次にそれが、「純粹なるもの」への渴望こそが悪を破壊するという、ヴェイユが述べる「真空」における自己浄化のメカニズムであることを開示する。さらに、言葉のうちに閉じ込められた詩ではなく、「日常生活の実体そのものであるような詩」において、「神への愛」であり「必然性への同意」であるものが、東洋というコンテクストにおいて、どのような様相を呈するのかを少しく明らかにしようとしている。

第八章 ケース・スタディ 2

映画『千と千尋の神隠し』をめぐって——アニメーションの詩学

映画『千と千尋の神隠し』の主人公「千尋」のキャラクターデザインは変化せず、終始一貫して、不細工で、ひょろひょろした、冴えない女の子として描かれている。しかし、二時間の時間の流れのなかで、鑑賞者は次第に千尋を「美しい」と感じ始めるであろう。それは、目には見えない千尋の魂の変化が、身体において美として表象されるからである。そしてその美の本質とは、ヴェイユが述べる「脱創造」、すなわち「自己無化」にほかならない。さらにこの「脱創造」には、自分がしたいことではなく自分がしたくないことをすることに同意しゆく「労働」が不可欠である。千尋は、労働を通して、身体のみならず魂が無となりゆく経験において、他者と世界への愛があふれ出て、他者と世界とつながってゆく。このことを宮崎駿監督は「ファンタジー」と述べているが、この「ファンタジー」とはまさしくシモーヌ・ヴェイユが述べる「詩」にほかならない。

第三部 善への欲望

第九章 愛について

本章では、ヴェイユがそのマルクス主義批判において、マルクスが、「プラトンの愛」という「媒介の観念」を見落としていることを指摘していることに光を当て、そのプラトンの愛とはいかなるものかを少しく浮き彫りにしようとしている。ヴェイユは、プラトン『饗宴』における

「^{エロース}愛」を、プラトン『国家』における「完全なる正義の人」に重ね合わせて考察している。

正義であるのに不正義であるとの汚名を着せられ鞭うたれ磔にされる「不幸」において、逆説的にも、はじめてわたしたちの自由を保証する「^{エロース}愛」が働くときヴェイユは考える。その愛は、社会科学においてのみならず、自然科学にまで拡張されている。「数学においても、必然性は、美において輝いている」と言っているのは、知性は愛において真に輝きだし、その愛をもって必然性への同意が真に可能となるからである。必然性が世界の美として輝き出すのは、知性にとって美という歓びの感情が不可欠であるからにほかならない。このように、社会科学と自然科学との接合点において、愛の位相が見出されることが、ヴェイユ思想の真髄となっている。

第一〇章 脱創造あるいは超越論的感性論

シモーヌ・ヴェイユの思想において、自覚とは、「創造されたもの」を「創造される以前のもの」に返してゆくことに同意する「脱創造」によって果たされる。本章では、この「脱創造」を美の視座から捉え直そうとしている。カントが第一批判で開示した「超越論的感性論」は、ヴェイユにおいて、「超越論的美学」となり、この「超越論的美学」のみが真理を解く鍵だとしている。自然的にはけっしてなしえない、「無であること」であり、「待つこと」であり、「真空に注意を傾けること」への同意は、無において美的感情に満たされるときのみ果たされる。そしてこのときにのみ、わたしたちは自己ではなく、自己の外側にある善への自らの眼差しが向かっているものであり、その善への眼差しがあるからこそ、わたしたちの存在が美しいのみならず、わたしたち自身のうちには世界は美しいと言っている、美の感情が溢れ出てくるのである。ここに、感性論が美学にほかならない位相が開示される。

第十一章 ケース・スタディ 3

映画『ライフ・イズ・ビューティフル』をめぐって——善への欲望

映画『ライフ・イズ・ビューティフル』は、「ホロコースト」という二〇世紀最大の醜悪さを、文字通り、美として表象しえた作品である。現象の醜悪さをはるかに超えて生の美しさがあふれ出るのは、ヴェイユの述べる「行為の動機」が、本来ならば、現象に取り込まれ、「低い動機」に墮してしまうところを、「高い動機」を維持し得ているからである。そしてそれが可能となるのは、行為主体のうちには不断に、^{エロース}愛が通っているからにほかならない。自らが死ぬか生きるかということよりも、もっと大切なものがわたしたちの生にはあるのだということ、わたしたちは、みずからのうちに溢れ出る^{エロース}愛を通して、^{エロース}愛によって知悉する。そのとき、わたしたちは、いっさいの外的救いが見出されない極限状況にあってさえも自由でありうる。この映画は、「善の映しとしての美」というプラトニズムがいったいどのようにして生きられ感じられるものになるのかを、映像芸術によって提示したものである。それはまた、シモーヌ・ヴェイユ倫理学

が、現代を生きるわたしたちの今日的な切実な問題へとダイレクトに遡及しうる証左ともなっている。

第四部 芸術と倫理

第一二章 表現について

表現は、芸術表現のみならず、行為や言葉そのものにおいても見られる。それはなにより、「見えない」心の世界は、「見える」表現を通して露わになるからである。そして、表現は美の感情に貫かれていなければならない、表現の美による輝きは、作者や行為者の心のうちに愛がぎざしている証となっている。それゆえ、わたしたちは、表現を通して自覚に至り、自らの生の創造をなすのである。本章では、シモーヌ・ヴェイユの行為という表現のみならず、宮沢賢治、ドストエフスキー、ブルーストといった文学者たちの芸術表現において、どのような自覚の過程が見られるのかを概観し、それから、イメージの哲学者と言いつけるヴェイユは、自らが表現そのものとなることによって、どのような象徴とイメージの爆発によって実在を震撼させ、覚醒させ、形而上学を開示しているのかを見極めようとしている。

第一三章 芸術創造と生の創造

シモーヌ・ヴェイユの表現すなわち彼女の「生の創造」は、結局のところ、「言葉」に収斂されることになる。「言葉」のみにおいて、他者を震わせ、他者と繋がる磁場を有している。それゆえ、彼女は、ソクラテスよりも、はるかにプラトンに近い。言葉をもって生の創造を開示することを、ヴェイユは、プラトンやソフォクレスとの対話を通して、すなわち、作品という「物」の観照を通して、実在を喚起し、自らの言葉を深めてゆく。本章では、生の創造が、芸術創造と同じく、真の表現となるためには労働が不可欠であることを、さらに、芸術表現における美と不幸の弁証法的関係が、なぜわたしたちの生の創造を促進するのかを開示しようとしている。

第一四章 芸術という技、労働という技

——シモーヌ・ヴェイユと西田幾多郎『善の研究』

シモーヌ・ヴェイユの美しい言葉の数々は、プラトンがその作品で開示した言葉の美に匹敵する力動性を有している。彼女の言葉の強さとその美は、「工場生活の経験」をはじめとした、世界の悪を自らの身体と魂において苦しみとして捉え直すことによって、強制である必然性が同時に従順であることを、美として表象する力をもちえたその証にほかならない。労働においてわたしたちの身体は幾何学となる。もっとも具体的なものが、もっとも抽象的なものとして表現される。その往還において、苦しみから美への転回が起るのである。本章では、花が花の本性に従って開花する姿に自覚の有り様を重ね合わせ、さらにその自覚の徹底が倫理へとひらかれる西田

幾多郎の思想の原点である『善の研究』における言葉を併走させることによって、さらに、ヴェイユと西田が、ともに暗い時代にあって積極的に芸術について語り出すことに着目することによって、「労働という技」から「芸術という技」への転回が美的感情を通してなされるがゆえに芸術が自覚と倫理を開示するという、芸術倫理学の積極性を開示しようとしている。

第一五章 ケース・スタディ4

映画『アメリ』をめぐる——見える世界と見えない世界

シモーヌ・ヴェイユは多くの童話や民話や神話のうちに、^{リアリティ}実在の探究をおこなっている。それは、童話や民話や神話の描き出す「架空の世界」は、大げさすぎるようでもあり、子供じみているようでもあるものの、そこに確かな真理があるからである。映画『アメリ』の登場人物たちは、誇張によって、まさしくヴェイユが述べる「不幸な人」ないし「不幸な人を疎外する人」として描かれている。どちらも自己のリアリティから隔絶しているために自由ではない。『アメリ』の登場人物たちは、どのようにして自らのリアリティを取り戻し、自由を獲得してゆくのであろうか。この映画を考察することを通して、シモーヌ・ヴェイユの不幸論における「言葉にならなさ」や「リアリティの欠如」からの脱却の過程が、わたしたちの心に美として映し出されることになる。この映画は、芸術の美をもって、「不幸な人」が「世界の美」に触れうる契機を指し示している。

第五部 詩をもつこと

第一六章 暴力と詩

——「人格と聖なるもの」、「『イーリアス』あるいは力の詩篇」を手がかりに

シモーヌ・ヴェイユの言葉は、日本における現実の問題に衝突したときに、どれほどの力動性を持ちうるのであろうか。二〇〇四年三月のイラクへの自衛隊派兵の問題点を、魂のレベルにおいて考察するならば、他人から悪をなされたときに「なぜなのか？」という問いを発する魂の部分であり、裏面から見れば、他人は悪ではなく善をなしてくれるに違いないと期待するわたしたちの魂の「善を希求する部分」が疎外されてしまっていることにある。本章では、ヴェイユが開示した、被害者のみならず加害者をも疎外される「力の支配」とは現実の世界においてはどのような位相を提示するのかを明らかにしようとしている。

第一七章 美的判断力の可能性——シモーヌ・ヴェイユとハンナ・アーレント

シモーヌ・ヴェイユと同時代を、さらに第二次世界大戦後を生き抜いたハンナ・アーレントは、ヴェイユと同様にカントの『判断力批判』から着想を得て、極限状況における判断力、そしてま

た、極限状況にいなかつた人々の判断力の可能性を探究している。だが、アーレントにあって、カントの「美的判断力」における「美的」は、捨象されてゆく。この「美的」には、耽美主義に陥る危険性が孕まれており、なによりヒトラーの行為そのものが、「政治の美学化」にはかならないのだとするならば、この危惧と判断力の変形は妥当であるように思われる。それでは、なぜヴェイユにあっては、「判断力」が「美的」であることが、むしろ強調されてゆくのであろうか。ヴェイユが戦後を生きたのであれば、「アイヒマン裁判」にどのような視座を見せたのであろうか。本章では、ヴェイユの思想に則してこの裁判における判断力の可能性を問うことをも含めて、ヴェイユの思想にアーレントの思想を寄り添わせることによって、美的判断力の可能性を立体的に浮き彫りにしようとしている。

第一八章 暴力と愛

シモーヌ・ヴェイユが生き抜いた「暗い時代」は、宇宙の必然性の重みを自らの意志によってはいかんともしがたい時代であった。犯罪が正当化される戦争という状況にあって、わたしたちはどのようにして自由でありうるのであろうか。そして、他者と世界とつながってゆくことができるのであろうか。本章では、ヴェイユが「暗い時代」に提示した論考「人格と聖なるもの」、「第一線看護部隊案」において、彼女が何をわたしたちの心に映し出そうとしたのかを見極めようとしている。さらに、この時代、ヴェイユは、古来さまざまな解釈がなされてきており、また現在もなされている、ソフォクレスの悲劇『アンチゴネー』をどのように読み解き、実在を喚起しようとしたのかを見定めようとしている。

第一九章 ケース・スタディ5

映画「ガイサンシー（蓋山西）とその姉妹たち」をめぐる——美しさという境涯

シモーヌ・ヴェイユが述べる「不幸」の経験が「奴隷の刻印」と言われる持続性を有するものであるならば、ひとたび「不幸」に陥ってしまった人は、どのようにして自らの過去と現在とに向き合うことができるのであろうか。本章では、外国人の立場から日本軍従軍慰安婦の問題に取り組んだ中国人・班忠義監督映画『ガイサンシー（蓋山西）とその姉妹たち』を読み解くことを通して、現象の醜悪さに取り込まれない魂の美はどのような位相にあるのかを考察する。美と詩がどのようにしてその人の生のリアリティと密接しているのか、また、暴力が詩の欠如と密接していることがどのようにして表象されうるのかを、本論文で取り上げる唯一のドキュメンタリー映画を通して開示しようとしている。

附論 日本におけるシモーヌ・ヴェイユの受容

本邦では、一九六〇年代に、シモーヌ・ヴェイユの思想が受容され、翻訳書や研究書が刊行さ

れている。本論では、加藤周一、鈴木大拙、片岡美智という、三者それぞれが、どのような視座からシモーヌ・ヴェイユの思想を受容したのかを解明し、さらに、なぜシモーヌ・ヴェイユの思想が東洋である日本においてひろく受容されたのか、また、その受容に孕まれる危険性を、とくに西田幾多郎との思想の骨格の類似を軸にして、考察している。さらに、現代において、どのようなシモーヌ・ヴェイユの思想の受容とその発展が可能であるかを展望している。